

総論

- 1 計画策定の意義
- 2 計画の性格と役割
- 3 計画の期間と構成
- 4 泊村の概要

1 計画策定の意義

21世紀の幕開けに当たり、我が国の社会・経済情勢は、高齢化社会の到来に伴う介護保険制度の制定、少子化に伴う人口の減少、IT革命等情報化の急速な展開、環境問題、地域間交流、男女共同参画の推進、そして、地方分権の確立など大きな転換期にさしかかっています。

本村は、平成7年度に策定した「第5次泊村総合計画」で「人と自然が調和した個性と活力あふれる村づくり」の基本構想を踏まえ各種施策を推進してきましたが、本村がさらに発展していくための方向性を見極めるとともに実現化の方策を明らかにし、村民の皆さんが安心して住んでいただけるための新たな村づくりを進めるため「人と自然が調和した心の豊かさが実感できる村づくり」を基本とした第6次泊村総合計画を策定します。

2 計画の性格と役割

この計画は、地方自治法第2条第5項の規定に基づき策定するもので、21世紀初頭から5か年の展望にたった村政の総合的かつ基本的な振興策を明らかにするとともに、その実現に向けて、村民や村の諸活動の目標を明らかにするもので、具体的には次のとおりです。

- (1) 村行政推進のための総合的かつ基本的な指針とします。
- (2) 村民の自主的かつ積極的な指針となるものです。
- (3) 国、県に対しては、本村として期待する施策の概要を明らかにするものです。
- (4) 国、県及び広域市町村圏計画との連携、整合性に配慮しながら策定するものです。
- (5) 運用については、各関係機関との協調のもとに、今後の経済・社会情勢の変化に対応して弾力的な運営を図るものとします。

3 計画の期間と構成

この計画は、平成17年度（西暦2005年）を目標にした平成8年度から平成17年度までの「基本構想」に基づき、平成13年度から平成17年度までの5か年の「基本計画」で構成しています。

(1) 基本計画

基本構想を受けて、それを実現するための施策を推進してきた前期5年間の成果と

課題を踏まえ、後期の5年間における施策を明らかにするものです。

(2) 実施計画

基本計画で示された具体的施策のうち、社会情勢や村の財政事情に応じて3か年を期間として実施すべき事業を具体的に示すもので、ローリング方式により本書とは別に策定します。

4 泊村の概要

(1) 位置と地勢

泊村は、鳥取県のほぼ中央部を占める東伯郡の東端、東経133°56′～58′、北緯35°30′～31′の間に位置し、東西6.2km、南北2.5km、総面積14.56km²で、県下39市町村中37番目の小さな村です。東は気高郡青谷町、西は東伯郡羽合町、南は東伯郡東郷町に隣接し、北は日本海に面しており、県庁所在地の鳥取市から30km、圏域の中心地、倉吉市から15kmの地点にあります。

地勢は、総面積の約70%を山地丘陵が占め、その山地丘陵地が海岸線まで段丘状に迫っているため、平地が極めて少なく、地形的には恵まれていません。また、そのわずかな平野部を国道9号とJR山陰本線が東西に走り、地域を南北に分断しているため、交通の便はいいものの、村土の均衡ある発展を阻害しています。

山地丘陵部は、山林・原野が大部分を占めていますが、その中に本村の特産である二十世紀梨などの果樹園が広がり、平野部では米を中心にスイカ、ほうれんそうなどの蔬菜類が栽培されています。

海岸部では東西に砂丘が広がっており、その中央部には県中部の沿岸漁業拠点基地として重要視されている第2種漁港の泊漁港があります。

(2) 沿革

泊村の歴史をさかのぼると、村内各所で縄文時代の土器などが出土していることから、およそ3千年前にはすでにこの地で人々が暮らしていたと推測されます。

また、戦国時代には山名刑部大輔の居城、河口城が置かれ、因幡、伯耆国境の要衝地として重要視されていました。

「泊」という地名は、船舶の停泊に便利であったことに由来するともいわれ、古くから海上交通の要衝として名高く、江戸時代には鳥取藩の船番所も置かれ、因幡と伯耆を結ぶ街道の宿場町としても隆盛をきわめました。

明治22年(1889年)には町村制が施行され、久津賀、泊、三橋の3村となり、大正7年(1918年)1月1日には3村が合併し、現在の泊村が誕生しました。

以来、大正、昭和、平成と世界の歴史の激しい流れの中、今日までの本村の歩んできた道程は決して平坦なものではありませんでした。しかし、全国に普及したグラウンドゴルフの発祥地として、また21世紀初頭の国道9号青谷・羽合道路の開通と泊インターチェンジの設置など、将来に向け明るい展望が開けようとしています。